

大豆

1 予報（8月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
紫斑病	—	やや多	(1) 前年の発生量は、平年並だった。(±) (2) 8月の降水量は、平年並か多い予報。(+)
マメシクイガ	—	並	(1) 前年の発生量は、平年並だった。(±)
吸実性カメムシ類	—	やや多	(1) 前年の発生圃場率は、平年より高かった。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント（各病害虫のおおよその防除適期は下図を参照のこと）

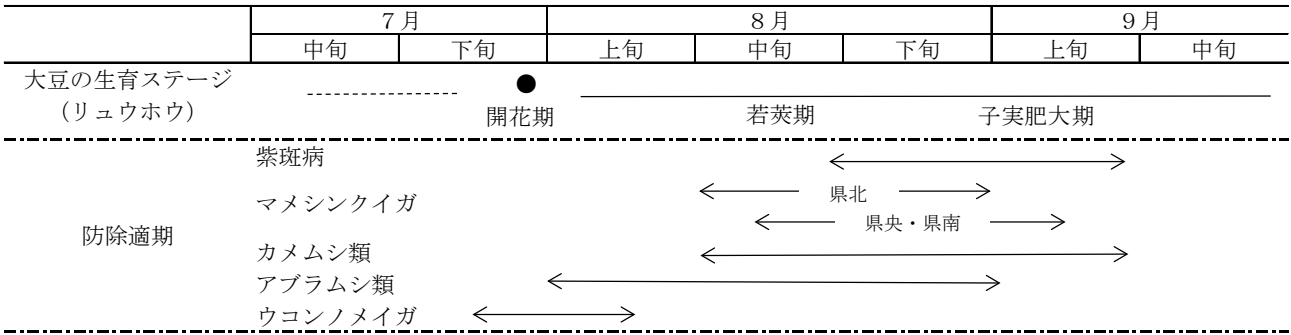


図 大豆病害虫の防除適期（平年の場合）

【紫斑病】

- 若莢期（開花後20日頃）～子実肥大期（開花後40日頃）に1～2回、薬剤防除を実施する。
- マメシクイガと同時に防除を行う場合は、マメシクイガの防除時期に合わせる。

【マメシクイガ】

- 連作年数が長いほど、被害の発生リスクが高い。
- 薬剤が莢によく付着するように散布する。
- 薬剤によって最も効果の得られる防除時期は異なるので、表1を参照する。なお、吸実性カメムシ類と同時に防除を行う場合には、有機リン剤か合成ピレスロイド剤を選択する。

表1 マメシクイガの防除時期

薬剤	防除時期	
	県北	県央・県南
有機リン剤	8月第6半旬	9月第1半旬
合成ピレスロイド剤	8月第5半旬	8月第6半旬
ジアミド剤	8月第3～5半旬	8月第4～6半旬

【吸実性カメムシ類】

- 開花後期～子実肥大中期に1～2回、薬剤防除を実施する。

【アブラムシ類】

- 多発すると早期落葉や、ウイルス病媒介による褐斑粒が発生する恐れがある。したがって圃場をよく観察し、増加傾向が認められたら防除を行う。この際、薬剤が葉裏にも十分付着するように注意する。

【ウコンノメイガ】

- 生育量が大きい過繁茂圃場や、葉色の濃い圃場において多発する傾向にある。
- 7月第6半旬に茎当たり葉巻数が3個以上確認された場合は、8月5日頃までに薬剤防除を実施する。
- 終齢幼虫には薬剤の防除効果が低下するため、防除時期が遅れないように注意する。

3 防除上の留意事項

- 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止対策を徹底する。
- QoI及びDMI殺菌剤は、耐性菌発生リスクが高いため連用を避け、2～3年に1回の使用に留める。

(3) 無人マルチローター（ドローン）による大豆の紫斑病やマメシンクイガ防除では、茎葉内部への薬剤の付着が劣り、十分な効果が期待できないため注意する。（令和2年度岩手県農業研究センター試験研究成果を参照）